

2025年4月25日

外国人児童生徒等の教育の充実に関する
有識者会議
第2回会議

指導内容の深化・充実に向けて

改めて

総合的なことばの教育としての 「日本語指導」

日本語学習を通じて達成を目指す課題

- ・文化適応
 - ・コミュニケーション
 - ・学習参加（認知面の発達、学力）
 - ・アイデンティティ
 - ・自己実現（キャリア形成）

日本語の発達（イメージ）

生活言語能力の発達（1～2年）

言語以外の情報を利用して、対面で日常的な口頭コミュニケーションができる。

学習言語能力の発達（～5-7年）

言語で思考活動ができる
（口頭コミュニケーション+読み書きの力）

日本語学習を支える力／
同時に育む力

母語・母文化と

出身国／地域での

①生活経験・非認知面の力

②認知面の力

（思考力・判断力・表現力）

③教科等の学習経験

／知識・技能

生活言語能力
(Basic Interpersonal
Communicative Skills)

認知的必要度（低）

文脈依存度（高）

（低）

学習言語能力 (Cognitive
Academic Language
Proficiency)

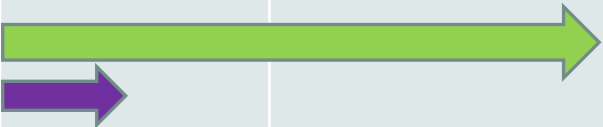
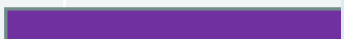
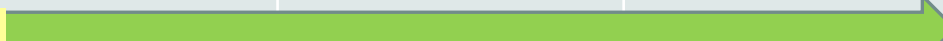
母語・母文化の元での経験・学習による力は来日年齢により異なる。
日本生まれ・育ちの子どもの場合は、「支え」ではなく、「育む」ことになる

in (1986) をもとに作成

「日本語」プログラムの内容とねらい (⇒個別の指導計画)

内容(→プログラム化)

- A 生活場面の語彙・表現、
会話の力
- B 日本語の発音・文字・文
法などの基礎的知識・
技能とその運用
- C 文章の読み・書きの技
能まとまった内容を聞く・
話す技能とその運用
- D 教科等の学習で必要と
する知識・技能を身に付
け、思考を支える日本語
能力
- E 社会的活動に参加する
ための日本語能力

日本語プログラム	～6か月	～1年	～1年6か月	～2年
A サバイバル日本語			緑: 低学年 紫: 高学年以上	
B 日本語基礎 (文字・表記・語彙・文法)				
C 技能別日本語				
D 日本語と教科 の統合学習				
JSLカリキュラム				
				
				
				
				

の取り出し指導の時間数
の発達に関する理解の不十分
語教育の専門性の問題から、
、日本語と教科の統合学習の学

日本語の取り出し指導の時間数
ことばの発達に関する理解の不十分
さ、言語教育の専門性の問題から、
「サバイバル」と「日本語基礎」の学
習に留まっているケースが少なくない

『外国人児童生徒の受入の手引き(改訂版)』を基に作成

課題・日本語能力・プログラム

課題	文化適応・コミュニケーション		学習参加(認知面の発達・学力)
	C アイデンティティ・自己実現(キャリア形成)		
言語能力※	①会話の流暢度 Conversational Fluency ＝生活言語能力	②弁別的言語能 Discrete Language Skills 音韻意識、音と文字の関係、文字認識、単文形成力、	③教科学習・言語能力 Academic Language Proficiency ＝学習言語能力
プログラム	サバイバル日本語		
	母		

言語の知識・技能だけではなく、それを基盤として、「課題・問題を捉え・解決する力」として、ことばの力を育むことが重要。
 それには、「課題」と「コンテキスト」の設定が要諦
 ⇒ **課題、コンテキストとして何を？**
その決定には、言語能力の捉え方のみならず、目指す「子ども像」と資質・能力が必要

※ カミズモデル「会話の流暢度・弁別的言語能力・教科学習言語能力」
 「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)」における言語能力モデル

外国人児童生徒等教育・ 「日本語指導」の現在

目指す子ども像や目標とする資質・能力
示されていない
指導体制・時間・指導者の専門性が多様



知識・技能に偏向
学びが分節化・分断
学習・社会参加のことばの力の育成に困難

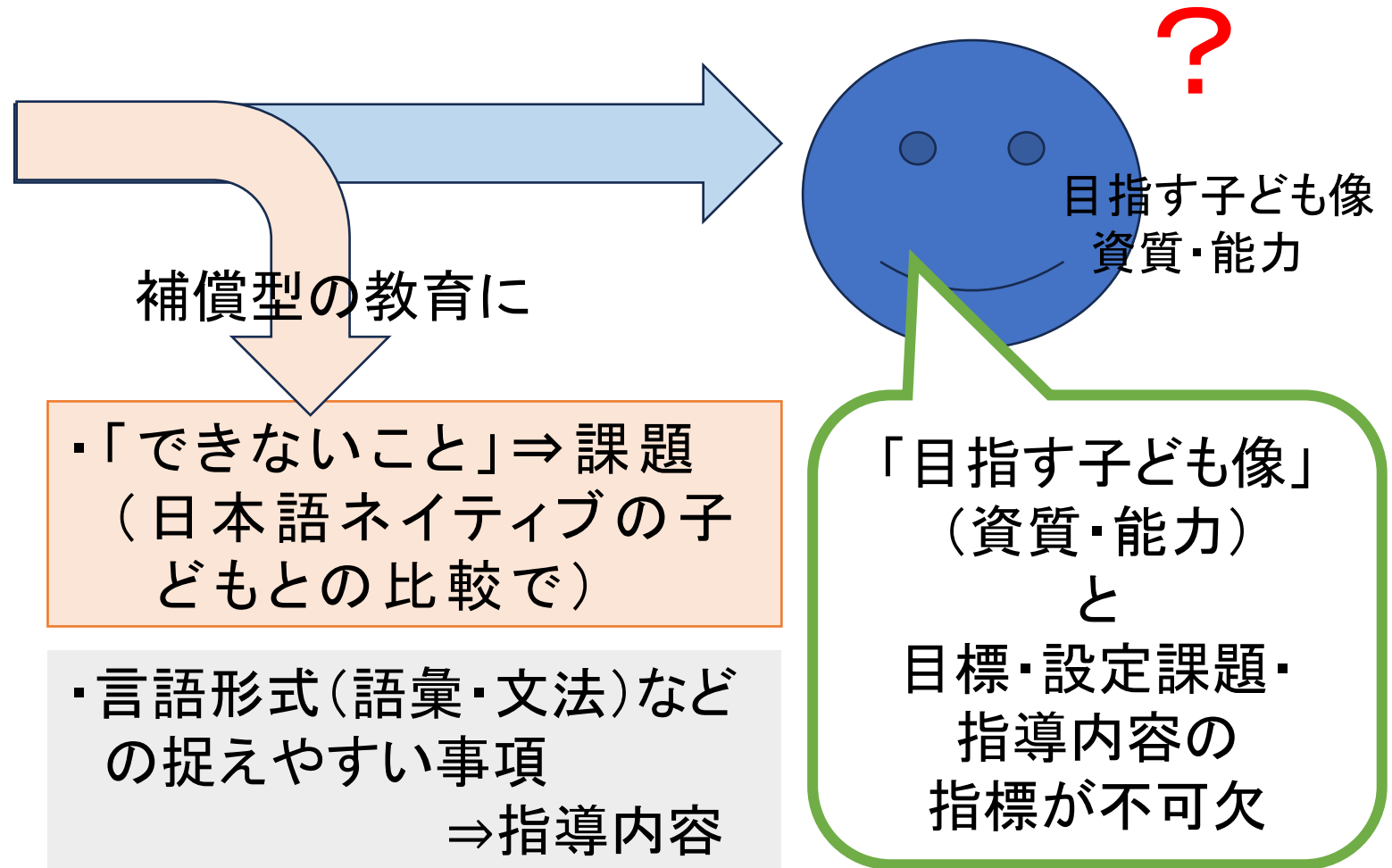
学びの連続性
社会的相互作用

「目指す子ども像」、目標、教育内容の指標がない 全てを担当者が判断・決定

⇒ 総合的なことばの教育としてのデザインは困難

実態の把握

- ・家族の状況・家庭環境
- ・母文化(文化的多様性)
- ・学習・生活経験
- ・非認知能力
- ・言語の力
 - 母語
 - 日本語
 - その他の言語
- DLA、「ものさし」で
- ・学力・認知面の力



外国人児童生徒等の教育・支援体制

初期
集中
指導

取り出しの日本語指導
(週1～5回／1～10時間)
来日後2年程度

在籍学級での学習
(入り込み指導がある場合も)

集住地域の一部では、初期集中指導が行われている。

- ・在籍学級では、サブマージョン状態
- ・おしゃべりができる頃に指導は終了

取り出し指導の実施体制

(市区町村・学校によるが、おおよそ次の3タイプのいずれか)

A: 拠点校を設置する



B: 日本語指導担当教師による巡回指導を行う

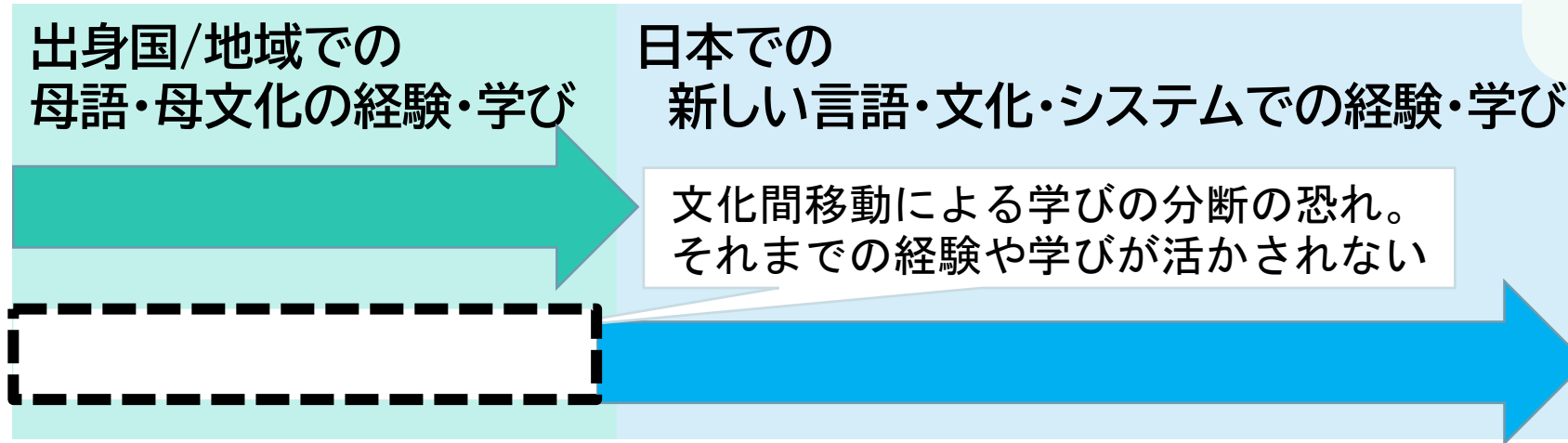


多様な教育・支援状況に応じて、担当者が日本語教育を設計するには、**やはり** 目標・設定課題・指導内容の指標が必要

教育環境の違い
指導の場・状況、
頻度・時間、担当
教員の専門性

学びの分節化・分断

①出身国/地域から日本への移動



②家庭と学校

文化・価値感の違い

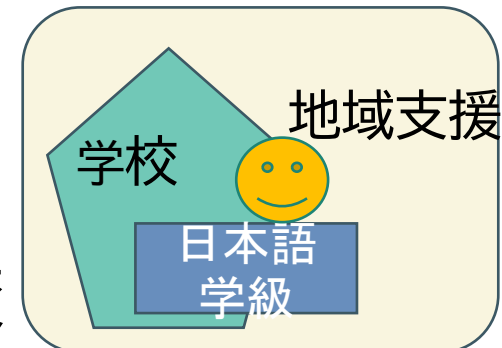


家庭と学校での経験・
学びが結ばれない

④子どもの成長発達

幼・小・中・高（校種間）の違い

②日本語学級・学級/地域支援と学校



日本語学級・地域支援
そして学校全
体の教育が結
ばれない

幼児期

学童期

青年期

成人期

家庭・保育園
幼稚園

小学校

中学校

高等学校

高等教育機関・職場

その子どもの成長に適した学習環境が提供されているのか？
学校種による制度・仕組みの違いによる学びの分断の恐れ

ライフコース・キャリア形成を支える

小・中学校から高等学校へ そして社会へ

幼児期

児童期

青年前期

青年後期

子どものこれまでとこれからを社会との関わりから捉え、教育・支援する

来日時の年齢は？ 現在の年齢は？
心身の発達は？
社会的・歴史的状況は(出身国で、日本で)？
いつ、何を経験し、どう対処してきたか？
家族や社会との関わりにおける役割は？
社会で、何を目指し、どう生きていくか？

育みたい力/ことばの力

社会的存在として将来を描き、
学習参加・社会参加しながら自己を実現するために、
自律的に学び続ける力

ライフコースの4要素(エルダー&ジール)

- ・歴史的時間と場所(文化的背景)
- ・社会的統合(関係性と役割)
- ・ヒューマンエージェンシー(目標志向性)
- ・人生のタイミング(戦略的適応)

エルダー&ジール著(本多時雄・岡林秀樹監訳)(2013)
『ライフコース研究の技法』明石書店

学びの 連続性の 保障のために

「日本語指導」
の計画・実施の
要点

「日本語指導」
のみでは不十分。
学校の全教育活動
を通じて実現

- (1) 経験・潜在的な力を把握し
その力が活きる学習をデザインする
 - ・ 母語・母文化(文化的多様性)
 - ・ 学習経験・学力
(知識・技能、思考力・判断力)
 - ・ **非認知能力に着目して**
目標達成に向けて 例) 目標への情熱
他者との協働 例) 社交性、思いやり
感情のコントロール 例) 自信、楽観性
- (2) 移動後の学びを**プロセス**として描き
各段階で求められる力を育む
⇒ **育むべき資質・能力**とは？
- (3) 発達・成長を長期的に捉え、年齢に応じた
社会との相互作用の機会を提供する
⇒ ライフコース・キャリア形成

目指す子ども像

外国人児童生徒等教育・「日本語指導」で
どのような資質・能力を育むのか。

＝

学校が多様性・包摂性を実現する上で
目指す資質・能力
(多文化共生・多文化教育として)

多文化共生の教育・多文化教育からの示唆

多文化共生の教育の視点

- ① **自己肯定感**を育成すること
- ② 外国に対する正確な知識を共有し、**科学的な認識力**を高める。
- ③ **人と関わる力**の育成
- ④ **多様な見方・考え方**を育てる



目指す人間像

多元的なアイデンティティの形成

佐藤郡衛(2019)『多文化社会に生きる子ども
12の教育』明石書店

ユニバーサルデザインとしての 多文化教育

- ① **学力をつける**—社会的平等
- ② **多様性を伸長**する—文化的な平等
- ③ **多文化社会で生きる力
(コンピテンシー)を培う**
— 多文化市民の育成

松尾知明(2023)『日本語型多文化教育とは何か』明石
書店

OECD Education 2030で示された資質・能力からの示唆

「変革をもたらすコンピテンシー」

赤：核になる要素
青：外国人児童生徒にとって重要だと考えられる要素

コンピテンシー	コンストラクト
①新たな価値を想像する力	目的意識・好奇心、開かれた考え方、批判的思考力、創造性、他者と協働すること、敏捷性、リスク管理、適応力
②対立やジレンマに対処する力	認知的柔軟性、他者視点の獲得、共感性、敬意、創造性、問題解決力、紛争解決能力、レジリエンス、寛容さ、他者への責任感
③責任ある行動をとる力	統制の所在、誠実さ、思いやり、敬意、批判的思考力、省察的思考力、自己意識、自己調整、信頼

発達の基盤となる力が必要

- ・ 認知的基盤（リテラシー（読み書きの力、デジタル・データリテラシー）・ニューメラシー）
- ・ 身体的、精神的基盤（心身の健康）
- ・ 社会的・情動的基盤（感情の抑制、開かれた考え方、他者との関わり方、道徳、倫理）

移動の年齢により、学びのプロセスも、各段階で求められる資質・能力も異なる

例えば
小学4年生で来日した
子どもの場合

外国人児童生徒教育・「日本語指導」
各段階で前景化する資質・能力の例
(変革をもたらすコンピテンシーを参考に)

来日直後	来日半年	来日1年	来日3年	それ以降
基盤となる力 心身の健康 他者との関わり方 道德・倫理 リスク管理・適応力		基盤となる力 リテラシー レジリエンス 他者と協働すること 問題解決力		基盤となる力 リテラシー 創造性 認知的柔軟性 批判的思考力

検討 1

- ＜総合的なことばの教育の推進＞
- ✓ 最終的にどのような資質・能力を育むのか。
 - ✓ 学びのプロセスの各段階でどの資質・能力を前景化させて教育するのか。
 - ✓ そのための日本語(ことば)の教育として何をどのように教えるのか。

目指す子どもの姿
資質・能力

＜例えば＞

社会的存在として将来を描き、
学習参加・社会参加しながら（社会に働きかけ）
自己を実現するために、
自律的に学び続ける力

学校全体での取り組み 多文化共生(多文化教育)

外国人児童生徒教育

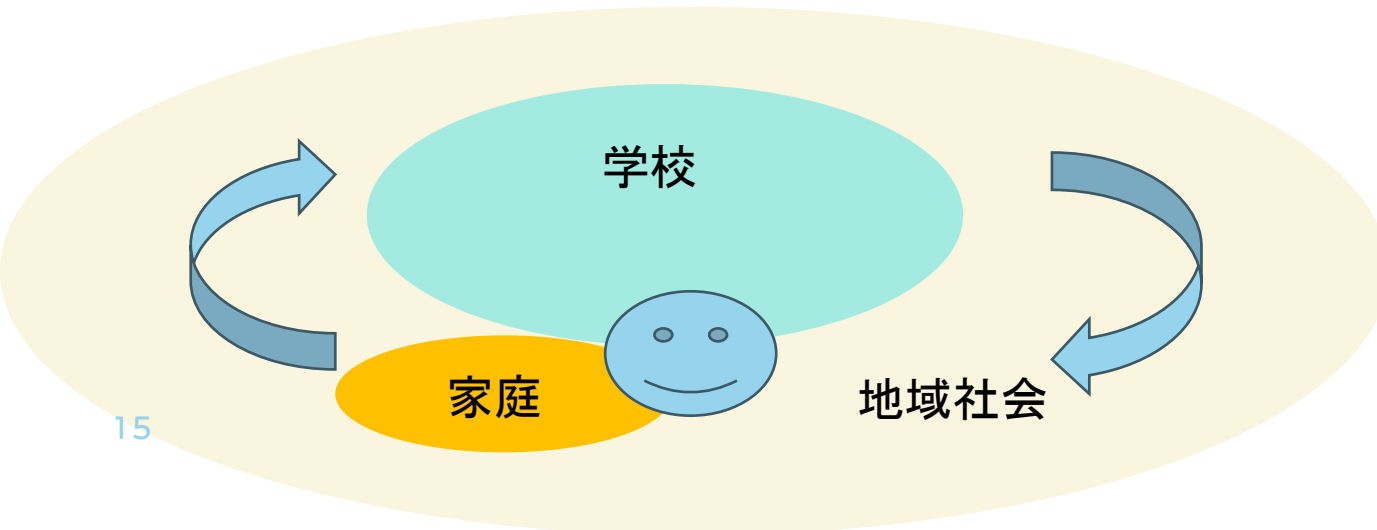
「日本語指導」
+〇〇教育 + 〇〇教育 +・・・

検討 2

多文化共生・多文化教育として
再設定・再構築

✓「日本語指導」(ことばの教育)と
学校全体で取り組む教育・支援とを
どのように関連付け、好循環をつく
ていくのか。

✓ 子どもの社会参加・社会的包摂
を実現するために、ノンフォーラム・
インフォーマルな教育・支援活動を
巻き込んだコミュニティをどう形成す
るのか。



ありがとうございました

